

つくば市中心部から筑波山へのルートにおけるトイレ利用機会

高橋 靖典（地球科学専攻 人文地理学分野）

目的： 本研究では、つくば市中心部と筑波山の間を移動する際に利用できるトイレの分布状況とその特徴・背景を明らかにする。

対象地域： 研究対象地域はTXつくば駅～西大通入り口交差点と西大通入り口交差点～筑波山ケーブルカー宮脇駅で各2通りのルートを選定した。前者は学園東大通（県道55号線）と学園西大通（国道408号線）である。後者は西大通入り口交差点～宮脇駅では国道408号線—国道125号線—県道42号線—県道139号線を経由する「メインルート」と、県道53号線 - 県道19号線 - 県道138号線 - 県道139号線を経由し古い集落の中を通る「つくば道ルート」とした（図1）。

トイレについて： 本研究では使用の際にそのトイレの管理者とのコミュニケーションをとる必要がないものを対象とした。具体的には、公衆トイレのほかコンビニエンスストア、大規模小売店、一般に開放されている公共施設などのトイレも対象に含めた。以下特に断りがない場合はここで説明したものをトイレと表現する。

手法： まずGPSを携帯してトイレを探しながら上記のルートを移動し、発見したトイレの位置と利用可能な時間帯などの属性を記録した。そのうちルートから300m以内にあるものを分析の対象とした。なお、道沿いにあったとしてもトイレを利用できると認識できなかったものは対象外とした。

次に取得したデータをArcGIS9.3に取り込み、ZENRINのZ-Mapをベースマップとして分布図を作成した。そして、Spatial Analystを用いて最も近いトイレへの距離で色分けをしたルートマップ（図1）を作成した。さらにこれらの図を土地利用図と重ね合わせ、分布の背景について考察した。

結果・考察： つくば駅、西大通入り口、宮脇駅の周辺とメインルート上の筑波山の麓といった移動の発着地や結節点にトイレの集積が見られた。公衆トイレ¹はこれらのトイレが集積している場所にしかなく、それ以外の場所では数百m～1kmごとに立地するコンビニエンスストアや小売店がトイレの利用機会を補完している形になっていた。トイレへのアクセスが悪い場所としては、つくば道ルートに入ってからつくば公民館などのある北条に至るまでの区間で1.5km以内にトイレがない状態が1km以上続く。メインルートも国道125に入るまでは、近くにトイレがない状態が続く。これらの地点は最寄のトイレが24時間利用可能でないため、深夜や早朝はさらにトイレの利用が困難になる。

公衆トイレが発着地や結節点周辺にしかない

め、トイレの分布は商業施設の分布にほぼ対応する。また、このことは公衆トイレの設置がその地域のトイレの利用機会にあまり寄与していないことを意味する。空白地域を作らないようにするには商業施設が立地する可能性の低い場所にこそ公衆トイレを優先して設置する必要があるのではないだろうか。

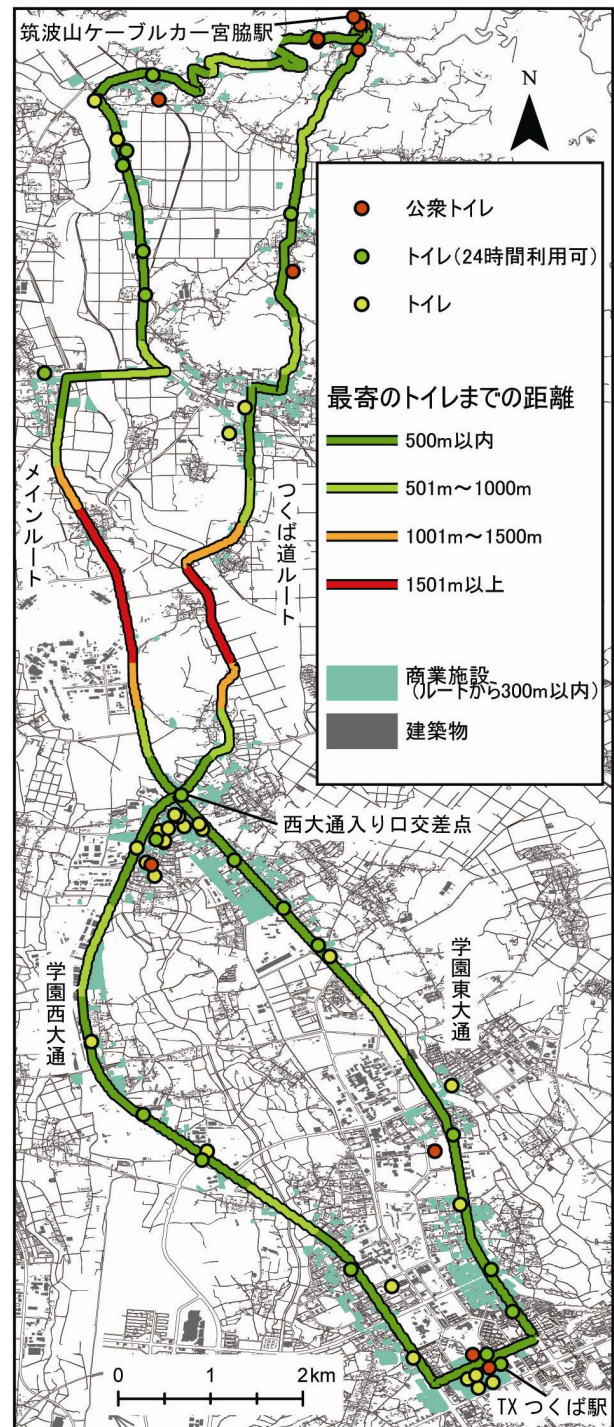


図1 トイレの分布と最寄トイレまでの距離

(現地調査により作成)

1 ここでは公園または公共施設に併設されており、入り口が屋外に面しているものを公衆トイレとした。